

機化—生物機能の発揮

“幸福となるためには、日常の些事に喜びを見出さなくてはならない（芥川龍之介）¹¹”

飼い猫のちびは、家猫です。死にかけていた生まれたての子猫を救い、去勢して、家猫にしました。2年経過しましたが、どんどんと安全な室内環境に慣れてきました。外敵による危険が皆無で、睡眠も十分、飢える心配もありません。時間を持て余すのか、猫じゃらしによる遊びを執拗に要求するようになってきました。動物も、睡眠欲・食欲・性欲の充足で満足するわけではなく、小さな虫を追いかけ弄んだり、匂いを嗅ぎまわったり、毛繕いしたり、撫でられたり、生物として備わっている五感（嗅覚・触覚・味覚・視覚・聴覚）を駆使して、生物としての本能・機能を発揮することによってストレスを軽減しているように思えます。人間分子もヒトとして備わっている本能・機能を発揮することにより欲求を充足させることに変わりはありません。

人間分子論では、生物に本来備わっている機能を単純に発揮させて充足を得ることを「機化」と呼び、幸福を得るための内的要因と考えます。バーランド・ラッセル¹²は、怠惰な時間を持て余すのではなく、精神的安定＝幸福感を得るためには、意識を内にではなく外に向けよ、と説いた。人間分子論の内的要因説と矛盾するように思えるかもしれませんが、そうではありません。意識を内に向けるとするのは、自己を他の人間分子と差別化して特別視しようとする試みです。いわゆるナルシズム（自己愛）です。特別な分子など存在しないとする人間分子論は、自己だけを特別視し、偏愛するような内に向かう思想を推奨しません。自己中心の思想は、陰鬱な暗い性質を帯びているものです。各々の分子は、自分は何者であるか（人間分子論では、夥しい数の分子の中の1つであり、それ以上でも以下でもないと考えます）などと考えていないで、本能の要求と合致するよう素直に生物機能を発揮すればよいのです。意識を外に向けよというのは、自身の趣向の統計的特徴（ばらつき・偏向）を客観的に把握した上で、四の五の言わずに、自分の体と心が要求する「生物機能」を単純に発揮せよ、と等価なメッセージなのです。スポーツ、コレクション、DIY、ギャンブル、ゲーム、楽器演奏、グルメ、音楽鑑賞、演劇・映画鑑賞、スポーツ観戦、旅行、園芸、インテリア、お洒落……、いわゆる趣味と言われるものは、ほとんど「機化」の範疇です。皆さんは、スポーツとギャンブルのような異質な趣味を同じ「機化」として扱うことに違和感を覚えるかもしれません。男の道楽として数えられる、飲む（食欲）・打つ（ギャンブル）・買う（性欲）は、依存症に陥りやすく、問題的機化行動と思われるかもしれません。人間分子論では、それらも含め「機化」行動の1つとして差別なく定義します。機化行動は、幸福にプラスにもマイナスにも作用し得ます。それは、行動主体であるそれぞれの人間分子のコントロール能力や価値判断に強く依存しています、それぞれの機化行動の属性の違いが我々の幸福に及ぼす影響の得失については大変興味深いテーマであるため、3-12節「幸せ行動の収支決算」の項で改めて深く考察することにしましょう。

悩みごとで心が張り裂けそうに不安な時、とにかく好きなサイクリングやスイミングに没頭してみる。不安を完全に消しさせることはできませんが、必死に体を動かしている間は、論理的な思考が影を潜め、あんなったらどうしよう、こうなったらどうしよう、という無益な思考ループから一時的に解放されます。また、あまりの心配に夜も眠れまいと思っても、極限まで疲れるといつの間にか眠りに落ちているものです。多忙は最高の精神安定剤である（芥川龍之介）。表現は違えども、古今東西、多くの哲学者が、意識を外に向け、空白の時間を埋め、怠惰を抹殺し、多忙を作り出すことが、精神の安定に効果的であることを指摘しているのです。

無人島で一人生き残った人間分子はいかにして暮らしたのでしょうか。アホウドリを撲殺し、島の海の幸、山の幸を探索して食したでしょう（狩猟・採集）。洞穴を見つけて枯草を敷いて居を

構え、雨水を貯めて住居基盤を築いたでしょう（居住）。アホウドリの皮を剥いで着るものを作り暖も取ったでしょう（服飾）。一日の終わりに岸壁に印をつけ、今日が何年何日なのかを把握していたでしょう（日々の記録）。これらの行動は、全て機化です。無人島という極限状態においては、いや、極限状態であるからこそ、ありとあらゆる生物機能を発揮し、あまりあまるほどある時間を埋めて多忙を作り出していかなければ、その孤独と絶望に耐えられはしなかったではないでしょうか。やってみても無駄だ、面倒くさいと、何もせず、ただひたすら助けを待っていた受け身の人から先になくなっていったことでしょう。

無人島から裕福な現代の都市生活に目を向けてみましょう。様々な文明の利器は、生物機能の代替として、人間分子から機化の機会を奪っているとも言えます。肉食獣が「かったるい」と言って、狩りをしなければ飢え死にしまいます。現代に生きる人間分子の多くは、「かったるい」と言って何もしないと.....、本当に何もしなくても生きていけてしまうのです。その余剰時間でいったい何をやるのでしょうか。引きこもりは、機化のほとんど全てを同居する親の世話を委ね、余剰時間で好きなゲームだけに没頭するのもかもしれません。それで幸福ならそれでいいのかもしれません。しかし、もしゲームをやる環境が失われたらどうなるでしょうか。

「面倒くさい」と「単一な機化行動へ埋没」は、我々の人生と幸福を脆弱なものにしてしまいます。出来るだけ多様で些細な機化を面倒くさがらずに行い、そこに喜びを見出していくことが幸福となるための重要な要件なのです。

[1] 芥川龍之介、侏儒の言葉（芥川龍之介全集第13巻）、岩波書店

[2] ラッセル、幸福論、岩波文庫